

2022年1月31日

2021年度聖路加国際大学大学院看護学研究科課題研究

**Support for Stroke Survivors to Return to Work and Find
Meaning in Their Work**

**脳卒中サバイバーが
労働の意義を実感できる復職をするための支援**

学生番号 20MN010

氏名 小山田早希

脳卒中サバイバーが労働の意義を実感できる復職をするための支援

20MN010 小山田早希

〔目的〕 本研究の目的は、脳卒中サバイバーの復職のプロセスを支援する人へのインタビューを通して、脳卒中サバイバーが労働の意義を実感できる復職をするための、復職支援者や会社の姿勢、及び、復職を困難にする要因を分析し、脳卒中サバイバーが労働の意義を実感できる復職支援のあり方について考察することである。

〔方法〕 本研究では、質的記述的研究を行った。脳卒中サバイバーの復職のプロセスを支援したことのある者、又は、支援している者で、復職した脳卒中サバイバーと同じ企業にて勤務する者に半構造的インタビューを実施し、分析した。なお、本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を受けた。(21-A034)

〔結果〕 研究参加者は、保健師2名、人事や管理職の復職支援担当者2名、脳卒中サバイバーの職場の上司が1名だった。脳卒中サバイバーが労働の意義を実感できる復職をするための、復職支援者や会社の姿勢として、【脳卒中サバイバーの状況を理解することで、復職支援者や同僚らが合意の上で復職を受け入れる】【復職支援者は脳卒中サバイバーの復職によって、脳卒中サバイバー自身が得られる価値や会社や同僚にもたらされる価値があることを理解する】、【復職支援者は、後遺症を抱える現在の脳卒中サバイバーの状態に合った仕事を用意する】、【復職支援者は、一人ひとりの脳卒中サバイバーと個別적인関わりをする】、【復職支援の過程で、同僚や復職支援者の過度な負担がなく余裕を持てる】、【脳卒中サバイバーが社員の一人として、同僚と共に働き続けることができる会社の風土がある】の6つのカテゴリーが得られた。また、脳卒中サバイバーが労働の意義を実感できる復職をすることを困難にする要因としては、【復職支援者や同僚が、理解や観察しきれない脳卒中サバイバーの状態や想いがある】、【復職支援者や同僚に、脳卒中サバイバーに適した復職支援をするための、情報や知識が不足している】、【後遺症を抱えた脳卒中サバイバーが、復職後の仕事に対して後ろ向きな感情を抱く】の3つのカテゴリーが得られた。

〔結論〕 脳卒中サバイバーが労働の意義を実感できる復職をするための支援では、個別적인関わりをしていくことが必要であり、公衆衛生看護職には、脳卒中サバイバーの想いに寄り添っていくことが求められていた。また、医療職の立場から、他の復職支援者や脳卒中サバイバーの同僚への支援や主治医との連携といった役割も担う必要があると考えられた。